

した。病院といっても薬があるわけでもなく、食事が豊富なわけでもなく、ただ何もしないで寝ていられるのが、天国といえは天国でした。

同じ栄養失調症でも痩せ型と、浮腫型とがあり、小生は痩せ型で入隊当時、六八^キの体重が四〇^キとなり、足が上がらなくなったものです。浮腫型は小便が出なくなり、身体中が青くふくれてくるのです。こうなると寝ていても苦しがり、何かに寄りかかって寝るわけで、水も飲めない症状になると、腰から大きな注射針？で水を抜く治療を施していましたが、多くの人は一回で一升瓶で三、四本も採ったものでした。

朝目覚めると隣の病人が音もなく死んでいく日が多くなり、残っている者の話題は、あったかい味噌汁でご飯が食べたい、寿司を食べたい等々、故郷の食物の話ばかりでした。

このような島の軍隊生活でしたが、渡島後は後続の兵が来ないため、入営以来終戦まで初年兵の立場で、大変苦しい軍隊生活でした。

幻の残留勤務「ペテワン集積所」

茨城県 篠田市 郎

戦史をひもとくと、南方戦場に展開した第二方面軍（豊島房太郎中将）隷下の楓第三十二師団（石井嘉穂中将）は、赤道直下のハルマヘラ島において終戦を迎え、部隊行動による復員完結は、翌昭和二十一年六月十四日をもって完了し、以後は単独行動による復員と記されている。

私が所属した歩兵二百十一連隊（楓第四二五五部隊）のペテワン乗船が同年六月二日であり、この日突然、私を長とする師団残留勤務隊が編成された。連隊の田辺港上陸は六月十二日と記されているが、篠田隊は任務完了後の九月上旬、名古屋港に上陸した。その際、司令部直轄部隊の故をもって、復員日を司令部の復員日時とするとの指示通り記載したため、結果的には残留勤務はわずかに二日となり幻の残留勤務となってしまった。

このような事実も知らず、任務を完遂した部下の心情を思う時、誤りを正し、事実を後世に伝えることこそ、私の責任であると痛感し、あえて筆を取ることとした。

連隊は昭和二十年九月、米軍からカタナにおいて武装解除を受けるや、直ちにカウに移駐を命じられた。

当時、食料はすべて現地自活に頼っていたので、道なきジャングルを六〇余^キの距離を食料もなく移動することは、その何%かが死を意味する苛酷なものであった。

それだけに、到着後の生活も、移動を命じられない他の部隊とは比較にならない、悲惨なものとなった。幸い、先住の海軍部隊の厚意によって提供をうけた甘藷苗が、ようやく親指ほどの太さに成長し、どうやら自活の見通しも立つと思つた矢先、予期しなかつた野鹿が毎夜のように現われ、成育順に食い荒らしてしまつた。防護の方法もなく、付近の動くものや口に入るものすべてを喰い尽くした今となつては、あるいは餓死するのではと、誰しも不吉な思いが走つた。このような時、昭和二十一年五月三十日、帰還命令が伝えられ、全員が死から生に呼び戻されたような朗報となつた。

連隊命令は「六月一日現在地を出発し、二〇数^キを行軍、ベテワンに到り翌二日乗船」というものであった。

ハルマヘラ島は、ほぼ四国の面積に匹敵し、ニューギニヤとセレベス島の間に位置する、文明と隔絶した未開の島である。人口が極めて少なく、全島ジャングルに覆われ陸路がなく、住民はもっぱら海上を、サンパンまたはプラウトと呼ばれる丸木舟を使用して往来していたのである。

太陽の光も届かぬジメジメしたジャングルの中を苦難の行進を続け、夕闇の中、やっとベテワンにたどり着くことが出来た。椰子林の中に各中隊ごとに一団となり、倒れ込むように装具を下したものの、乗船地らしき設備もなく、ここでゴロ寝の一夜を明かすことになった。

「機関銃の篠田中尉殿はどちらにおられますか」と遠くの闇の中から二度呼ぶ声が聞こえてきた。何事かと返事をする、暫くして誰かが到着した気配であるが、姿は分からなかつた。

「連隊命令を伝えます。篠田中尉は残留業務のため、師団司令部に転属を命ず。なお各隊からの転属者たる縫

工、靴工経験者を掌握すべし」

「何っ、転属」私は鉄槌で頭を殴られたように驚き絶句した。苦しかった在島二年のさまざまな思い出とともに、明日入港する船は何時ごろ入港するのだろうか、ボンヤリ考えていた時だけに、最悪の貧乏くじを引き当てた無念さで、ぼう然としたのも当然である。

ようやく覚悟を決め、連隊長、三吉梯一中佐（物故、兵庫県出身）の所に行き、来意をつけると、

「貴官を男の中の男と見込んでお願いする。カウにおいての貴官の働きを考えると、今後予測される困難な仕事を完遂できるのは、貴官のほかにはないと思われる。残留業務に関する連合軍から師団に対する命令は、このハル島（在島時は略してこう呼んでいた）を戦争以前の状態に復することであるが、貴官なら連合軍を相手として、どんな逆境の中においても任務の完遂は可能であると思える。どうか日本軍の名誉にかけて、もうひと働き頑張ってください。頼む」

こう頭を下げられては、部下として「嫌です」と申し上げることも出来ず、釈然としないものの、お受けする

決心を固めた。

「分かりました。連隊長殿のご無事のご帰還を心からお祈り申し上げます。任務は誓って完遂致しますから、なにとぞご安心下さい。」

そして握手を求められた連隊長の眼鏡の奥に光るものが見られた。こうして臺北派遣楓第四二五一部隊篠田隊が誕生したのである。

当時、正確な組織や配備について、下級将校の知るどころではなかったが、石井師団長指揮下の総兵力は約六万人。うち海軍部隊は第二十六根拠地隊司令官一ノ瀬中将以下約一万人。残余の五万人は陸軍であったが、その半数以上が付近の海域で撃沈された輸送船から救助された、兵器を持たず指揮系統も異なる部隊で、うち二万人が陣没した。

命令によると、「ハル島を戦争以前の状態に復する」とあるが、よもや諸施設を撤去する作業とは考えられず、残留総員も知らされず、しかも入隊前、背広服と靴作りの経験者だけに限定して、残留者としたこととはどうあっても結び付かない。

ハル島最後の、いや、軍隊最後の露営の草枕となるはずの六月一日の夜は、悶々の一夜となり「夢なき出発への前夜」となってしまった。

それにしても、発令されたすべての兵が悲運の貧乏くじを引き当て、落胆したわけで、斉藤上等兵も私の伝令でなかったら、本隊と一緒に復員できたことを考えると「恨みなよ斉藤」と慰めざるを得なかった。

夜明けを待ち、島軍曹に隊員の掌握を命じ、集積所の全容をつかむために一人海岸に出た。そこはリーフが途切れ、藍色をした水族館で見るとような魚が泳ぐ、静かな広い内海が広がっている。

幅四呎、長さ五〇呎ほどの、椰子の丸太で作った栈橋が突き出ており、栈橋に続く幅七、八呎の道の右寄りに、一〇人ぐらい住めるアタップ葦の屋根だけの、こわれた小屋があり、五〇呎ほどの長さの道の切れたところに一間四方の屋根だけの小屋があった。

そして、その左側一〇呎ぐらいの場所に幅一〇呎、長さ二〇呎もあるうかと思われる、屋根も周囲もアタップで覆った倉庫らしき建物が二棟並んでおり、そこに小銃

を持った黒人兵が警戒していた。

片言のインドネシア語で話しかけると、どうやら通じ、彼らがインドネシアの兵補たちで相手国はオランダ軍であることも分かった。兵補たちは二人で二十四時間交替なしの勤務であり、私が日本軍の隊長であることを話すと、トワン（ご主人様）と呼び、極めて親日的態度であった。そして「日本軍は戦争に負けていない。なぜなら、インドネシアからオランダ軍を追っばらってくれたではないか。だから負けていない」彼らにしてみれば、長い間オランダの支配に苦しめられ、今次戦争によって独立を果たし、自分たちが文明国並みに軍服を着、小銃を持つる身分になれたことが嬉しいのだ。そのインドネシア解放のために戦ってくれた恩人が日本軍であり、我々の祖先も海を渡って遠い北の国からこの地に渡ってきたのであるから、新威であるとの論理であった。

朝食後、連合軍兵舎に行くことにした。通訳も連れず内心不安であったが、隊長はタドタドしい日本語で、レイメイ少尉と自己紹介したので、驚きとともに国境を越えた敬意と親しみを感じた。そして「早速、本日の乗船

部隊の検査から、オランダ軍に代って実施して頂きたい。今日の作業はそれだけです。また倉庫の管理も一任します」と極めて穏やかな態度であった。早速、移管された倉庫の物資を確認するため、手前の倉庫に入ると、椰子の丸太を台にして木箱が品目別に整然と詰まれ、在庫數量表も置かれ、これらはすべて食料であったから、私は宝の山に踏み込んだような驚きと喜びを感じた。

次の倉庫は床板が張られシンガミシンが百数十台積まれ、大量の背広服生地や軍用衣類、服や靴の木型まで保管されている。無い無いづくしの生活の末、乗船命令によってようやく餓死を免れた私にとっては、信じられないほどであった。これらの物資は、百年戦争と称して故国から持参した品々を、大切に隠匿していたものと思われた。

残留する兵士たちは、帰国の喜びにわく部隊から別れて、足取りも重く集まってくる。人員は三〇人前後のようだ。私は初対面の兵士たちに訓示を行うことにした。

「今日から諸君と一緒に残留勤務につく隊長の篠田中尉である。突然の命令によって戦友たちと一緒に復員出

来ないことは非常に残念である。しかし、連合軍命令であれば、誰かがやらねばならない。これが敗戦の現実である。今後如何なる任務を与えられるか不明であるが、「日本国民を代表して」と心を新たにしていこうではないか。お互い不運なもの同志、一致協力して当たらうではないか。進駐しているのはオランダ軍とインドネシア軍の兵補たちだ。言葉の相違によるトラブルを起こしてはならない。不満があったら直接俺の所に来い。今後は倉庫内の食料は、俺の責任において、自由に食べてよろしい。制限はしない。只今からオランダ軍に代って、聯隊の乗船検査を実施する」

長い訓示となったのも、残留命令によって半ばやけくそとなり、冷静さを取り戻していない兵に喝を入れるためのものであった。お互いに初対面で名前も知らない寄せ集めの兵士たちは、新隊長がどんなことを喋るかと注目していたようで「今日から食料を制限なしに、倉庫から引き出して食べてよろしい」の言葉に一瞬生気が走り、緊張していた顔の表情がゆるむのを感じた。

乗船検査も、よもや戦友から受けるとは思えず、何回

も予行を繰り返していただけに、簡単に終わった。将校の中には、戦死者の遺品を持ち帰りたいので何とかして欲しいと、私の所に来る人もいたので、検査終了後、棧橋で手渡すことにした。今日はこれで指示された作業は終了。午後は兵舎の構築作業を行うことにした。

同じ立場にあつて乗船するはずの兵士たちが、命令とはいえ戦友の検査をする気持ちは、また複雑である。次々棧橋から大発に乗って本船に向かう戦友たちがいなくなると、ジャングルは嘘のような静寂となり、いよいよ残留の実感がヒシヒシと感じられてきた。

午後の作業中、船が到着し武装したオランダ兵の一隊が上陸した。そしてトラブルが発生した。

というのは、上陸直後のオランダ兵数人が、我々が作業中の棧橋に現われ、船を繋ぐ丸太の上に椰子の実を置き、これを代る代る射撃し奇声を発していたからである。これは、明らかに日本軍を意識しての示威運動であろう、危険で作業も出来ない。私はこれを放置出来なかった。「よし、俺が交渉して奴らが妨害しないよう申し入れてくる」と隊長室に向かった。

「貴下の兵士たちが、我々が作業をしている場所で射撃を行っている。これでは作業が出来ない。私は日本軍の隊長として、日本国の名誉にかけて、貴下の命令は絶対に守ることをお約束する。だから射撃だけは中止して頂きたい」

「分かりました」、これで一件落着であった。以後このような無謀な行為は全く起こらなかった。そして、私のオランダ軍を恐れぬ勇氣と語学力？と型破りの統率力に、以前からの部下同様、信頼を深めてもらったことは望外の喜びであった。

翌朝の指示は、オランダ兵の背広服と短靴を、倉庫内の生地を用いて作ることであった。各人の趣好に応じて作れるよう、すべて細かい部品まで揃っていたのである。

これでようやく命令のなぞが解明出来た。命令は、ハル島を戦争以前の状態で復することであっても、事実は、米軍に代つて進駐してきたオランダ軍が、倉庫内の大量の服地や皮革類を見て、兵士たちの戦場土産にしようと考えた、ということである。そこで急遽日本兵の中の職人たちに作らせようと、ペテワン最後の乗船部隊から必

要な人間を引き抜いたというわけである。

私が毎日訪れるレイメイ隊長は、三十歳半ばの学者肌の温和な人で、何時も机の前で部厚い本を手放さない紳士の軍人であった。だから、私の要求にも素直に応じてくれたものと思われる。

オランダ軍兵士たちも、先勝国の一員として気負って乗り込んできたものの、注文した靴や服が一日一日仕上がりに、仮縫いの人型につるされてゆく作業工程を、窓越しに見るようになると、言葉は通じなくとも心と心のふれあいが生まれ、なごやかな支配関係となった。

幸い倉庫には、海軍が残した麻雀用具があったので、早速兵舎に持ち込み、娯楽に役立てることが出来た。また兵士たちを喜ばせてやろうと考え、ドラム缶風呂を作らせたがこれには全員喜んでくれた。南方出陣のため、北支那鄒県を出発した昭和十九年二月以来の入浴であっただけに、感激もまた格別であった。

衰弱していた兵士たちも全員健康を取り戻すことが出来、残留の不满も忘れ、一糸乱れぬまま八月下旬に入った。この間、オランダ兵は注文した品が完成すると、次々

と交替し、また新しい兵士たちがやってきた。まさにジャングル内の縫製工場であった。

八月二十三日レイメイ隊長の部屋に行くと、

「長い間ご苦労でした。明日入港する船で帰国して下さい。日本軍の労に報いるため、必要なものは何でも持って乗船して下さい。もちろん乗船検査は省略します」と突然の帰国命令を出し、我が隊の作業に感謝された。これも手先の器用な兵士たちが、注文服や靴を作ることが残留作業であると聞かされて、水を得た魚のように一生懸命、時間を忘れて作り、期待に沿ったことが、異例の感謝の表現につながったものと思われる。作業中の兵士たちも、最後の日とあって、手掛けた品を完成して依頼者に渡そうと、夜を徹し感激させた。

翌日は、栈橋まで見送りに来たオランダ兵の手を振るなか、本船に向かった。敗者の面影も消え、今はただ彼らから感謝され、お互いの中に人類愛を見たと感じられたのであるが、これも外界から隔絶された三カ国の軍隊がひっそり暮らしていたためであろう。私は連隊長に申告したとき「誓って任務を完遂しますから、なにとぞご

安心下さい」の約束を完全に果たしえたことを確信した。こうして九月上旬名古屋港に上陸したのである。

戦史にも記載されない「小さな部隊の大きな残留労務」こそ、「事実は小説より奇なり」の好例であろう。私は師団の責任分担を、職業軍人に非ざる、予備役の、しかも一下級将校によって達成されたことに、深い意義を感じた反面、祖国復興こそ我らの双肩にあることを痛感した。

昭和も平成と改まり、経済大国として繁栄を続ける今日、当時の兵士たちはすべて老境の人となったのであるが、我々の尊い体験を風化させることなく次代に伝えることこそ、現代に生きる日本国民の責務であることを痛感するものである。